慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Urlich von Wilamowitz-Moellendorff, History of Classical Scholarship, Pp. XXXII+189. Translated from the German by Alan Harris, Edited with introduction and notes by Hugh Lloyd-Jones
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.2/3 (1983. 7) ,p.154(260)- 157(263)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830700-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、個々の中・小領主の興隆・没落はあっても、階級としての Knight 層は健全であったこと、と考えたい。これは要するに、Edward Miller の書の主張するように、極めて小数の貴顕の下に、相当の経済力をもつ広い層が生れていたことを考えるべきだとする立場に連なる。

Urlich von Wilamowitz-Moellendorff;
History of Classical Scholarship.
Pp. XXXII+189.
Translated from the German by Alan Harris, Edited with Introduction and Notes by Hugh Lloyd-Jones
Duckworth, London 1982. £18.00.

真下英信

今日に至る二千年以上にわたり綿々と続けられている古典研究の歴史を知るには一六二九頁に及ぶ J. E. Sandys, *A History of Classical Scholarship* (vol. I. 1903; vol. II. III. 1908. rep. 1967) や R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship* (I. 1968; II. 1976) が基本書とされている。しかしながら、両書とも何分にも大冊であり、しかも前者は様々の資料を得るのには頗る便利であるが、記述は事実の羅列に終始し批判的ではない。他方、後者の内容は極めて高度ではあるが、十九世紀に関しては余り詳細には論じておらず、我々現代の読者にとって特に重要な十九世紀後半から今世紀に至る時代は考察の対象外となっている。

ここに紹介する本は、上述の二書程網羅的ではないが、簡便な古典学研究史の本として幾多の人々に読れ今日なお類書中では名著の誉れ高い Wilamowitz-Moellendorff の *Geschichte der Philologie* の英訳本である。原書は、実に今から六十年以上の昔、一九二一年に A. Gercke; E. Norden 編纂の *Einleitung in die Altertumswissenschaft* (注1) の二版の一章として上梓されたものである。なお、碩学、著名な著者についてここで改めて述べる必要はあるまい。

評者がこうした〝古い〟書をこの欄に取り上げた理由は、本書が内容上勝れており今なお読者が興味を覚える記述に満々ていることに加えて、英訳本は原書の欠点を改良し、一般読者も読めるようにした為に一層利用価値が高くなったと考えたからである。

英訳本の第一の特徴は、Oxford 大学のギリシア語の Regius Professor である H. Lloyd-Jones により、所によってはかなり詳細な脚注が付せられたことである。Pfeiffer が述べているように (*op. cit.* p. IX)、原書には著者の記憶違いによる誤りがあり、しかも、記述が時として非常な主観的評価に基ずいてなされている所がある。しかるに、英訳本ではこうした欠点が Lloyd-Jones の注により逐一訂正されており、読者には極めて有益である。彼は脚注を付すにあたり、著者の記憶違いを訂正したり (e. g, n. 343)、著者が諸研究家に対して極端な評価を下している時は、そ

の事実を忌憚なく指摘している。例えば、著者の W. Dindorf (n. 534), J. Markland (n. 331), F. W. Schneidewin (n. 551) 等に対する評価は、Lloyd-Jones によれば少々酷評すぎるものであり、かならずしも均衡得たものではない。また、F. A. Wolf を著者は余り高く評価していない (p. 108; cf Pfeiffer, *op. cit*, p. 176-177) し、アメリカの研究状況についてもほとんど言及していない (n. 590a) 事実が、古典研究史に余り馴染のない読者にも脚注故に容易に理解出来る。こうして訳文と脚注を対照しながら本書を読み進めていくと、国民感情や個々人の置かれた立場の相違などがそれとなく行間に感じられ、あたかも古典研究史と言う巨大なドラマの一場面を垣間見るように思われ評者は非常な興味を覚えた。

脚注の第二の効用は、諸研究家の生没年が簡単ながらも示されているので読者が年代の動きを容易に理解出来るようになった点である。また、生没年と並んで、関連する Sandys, Pfeiffer の記述箇所の頁数が示されているので、参照、探索が非常に便利である。さらに最後に、脚注の効用として、単に著者の誤りを正すだけでなく、著者の評価、判断がしばしば議論の的になっている所ではその事実を指摘し、加えて、簡潔ながらも最近の研究状況にふれられている事が挙げられよう。こうして、読者は英訳の脚注を参照することにより、著者の難解かつ時には暗示的な表現をより正確に把握することが出来るようになっている

英訳本の第二の特徴は、Lloyd-Jones の手になる僅か三二頁ではあるが、本書の内容、執筆時代、著者の基本的立場等を理解するのに極めて有益な序論が掲載されていることである。この序論は本書の内容理解に役立つばかりでなく、原書のみか Sandys, Pfeiffer の記述をも補足する機能を果しており英訳本を価値あるものとしている。

彼は、ここで古典学の諸問題を手際良く論じている。まず初めに、Philology の原義、英語 Philology と独語 Philologie の用法の相違を論じた後に、Wilamowitz-Moellendorff にとって Philologie の研究は十九世紀ドイツの古典学者が確立した、古代の包括的綜合的研究を目ざす Altertumswissenschaft の研究の歴史そのものであったと述べている。そして、ルネッサンス、Scaliger や Casaubon らの活躍した十六世紀、宗教戦争下の一時的衰退、十七世紀の再発展、十八世紀ドイツの Goethe, Lessing, Herder を経て、十九世紀から、G. Hermann に代表される専ら言葉の研究とテキストの研究を第一とする人々と対決しながら、K. O. Müller, Welcker, Boeckh らの手を経て如何に Altertumswissenschaft が成立したか回顧している。

だが、こうして古典学が完成すると同時に、学者達は自己の狭い専門分野に専念していく一方、無味乾燥な実証主義が古典研究にも潜み込んで来た。かかる古典学の在り方を痛烈に批判したのが F. Nietzsche で、ここに彼と不倶戴天の敵たる Wilamowitz-Moellendorff の間で古典学研究方法、目的をめぐり運命的とも言える熾烈な論争が展開された。この対決は両者の師である F. Ritschl と O. Jahn の対立以来の因縁的なものや両者の性格の相違のみでなく、本質的には Philologie に対する根本的な

見解の相違に原因があった旨、要領良く説明されている。

続いて原著者の諸著作と彼の同時代の人々を論じた後に、彼の偉大さと欠点が指摘される。Lloyd-Jones によれば、彼の方法は Altertumswissenschaft なる考えに基ずいている限りおのずと歴史中心的であった。それ故、人類学や宗教学でしばしば重要な方法となる共時的研究態度が欠落すると共に、審美的な側面が無視される傾向にあったことを Pindaros 研究を例に挙げながら指摘している。この点、Lloyd-Jones は、後に Nietzsche と訣別したがその友人 E. Rohde の研究方法を高く評価している。

次に、ドイツ古典学の諸外国への影響が論じられている。この部分は、原書に欠如している今日に至るまでの古典研究史が回顧されており、既に述べた通り、英訳本を価値あるものとしている。

序論の最後は、Wilamowitz-Moellendorff との論争を契機として Nietzsche が予言した古典研究の没落、危機の問題を論じている。この問題は、Nietzsche が警告した当時はまだ切追感がなかったが、二十世紀に入るとヨーロッパ各国で再び大きな注目をあびるようになった。Jaeger, Reinhardt, Pfeiffer らがこの問題に如何に対処しようとしたかに言及しながら、古典研究の危機の本質は、ヨーロッパ社会のアメリカに代表される産業文明への傾斜がもたらしている教育全体の変化にあると指摘されている。すなわち、実務的な教育が重視され、ギリシア語、ラテン語を学ぶに相応しい頭脳の柔軟な年令での古典語教育が益々疎かになっていることが根本問題とされている。そして、古典教育の危機に対する Hölscher の見解を踏まえて、古典研究の価値、有用性を強く主張して序論を終えている。小論ながらも古典学の諸問題、意義を考える上に恰好の論文となっている。

ところで、本書の内容についてはここで逐一改めて紹介する必要はないと思われるので、最後に、Pfeiffer や Sandys の本と比較しながら本書の特徴を二三述べて終りとしたい。

まず、本書は両書と異なりヘレニズム時代の記述はほとんどなく僅か半頁を割いているにすぎない。この記述方法は著者の古典学研究への態度に基ずくと思われる（p. 1-3 参照）。第二の特徴は既に、論じておいたが、本書の記述はかなり抽象的、暗示的で仲々理解し難く難解である。

最後の凡そ二十頁で、著者は過去五十年程を回顧しながら、個々人の研究活動に拘泥せず全体的な流れを論じており、国際協力の必要性、発掘調査、碑文学、テキスト批判等の問題を述べている。皮肉な見方をすれば、ここには Altertumswissenschaft が各々の分野に拡散する直前の状態が示されているとも考えられよう。しかし、著者の古典学研究態度の正否は別として、我々もやはり現代に生きる人間として、個々の専門分野に埋没することなく古代世界を包括的に捉える必要性を本書を読んで評者は痛感させられた。なお、英訳本と原書を逐一比較参照する余裕はなかったが、大旨原本を忠実に訳出しているようである。

（82. VIII. 12）

（注一）

本書からは、既に、P. Maas の著わした二章、Textkritik 及び Griechische Metrik が英訳されその方面での重要書として広く利用されているのは周知の事であろう。ちなみに、訳書を記載しておこう。

P. Maas (Translated by B. Flower),
Textual Criticism. Oxf. U. P. 1958

P. Maas (Translated by H. Lloyd-Jones),
Greek Metre. Oxf. U. P. 1962